

# ハズガナイとハズデハナイについて

岡 部 嘉 幸

- <目 次> 0 はじめに  
1 ハズダの基本的意味と用法  
2 ハズガナイとハズデハナイ  
3 ハズガナイとハズデハナイの違いはどこからくるか  
4 おわりに

## 0 はじめに

現代日本語の助動詞ハズダの否定形には、ハズガナイ<sup>(1)</sup>とハズデハナイ<sup>(2)</sup>という二つの形式があるとされる<sup>(3)</sup>。そして、よく知られているように、この二つの形式が表す意味は互いに異なっている。本稿は、これら二つの形式ハズガナイとハズデハナイの表す意味と用法を整理するとともに、ハズガナイとハズデハナイの表す意味の違いがどこから生じるのかを論じることを目的とする。まず、第1節で肯定形終止法のハズダの基本的意味と用法の広がりを確認し、それとの対応を見る形で、第2節で、ハズガナイとハズデハナイの表す意味・用法を整理する。さらに第3節では、ハズガナイとハズデハナイの表す意味の違いを、「～ガナイ」「～デハナイ」という述べ方一般の差という観点から説明することを試みる。

## 1 ハズダの基本的意味と用法

ハズガナイとハズデハナイの具体的な分析に入る前に、肯定形終止法のハズダ（以下単にハズダと呼称）の基本的意味と用法の広がりを確認しておきたい。これについては既に、岡部（1998）で述べているが、議論の都合上、概略を述べることをお許し願いたい。岡部（1998）では、ハズダの基本的意味を以下のように規定した。

### (1) ハズダ＝事態を理屈の上で成り立つ事態として語る

このような基本的意味をもつハズダで事態を語る場合には大きく二つの場合がある。第一は、ハズダで語られる事態を理屈の上で成り立つ事態としてだけでなく、話し手の存在する現実の世界においても成り立つ事態として語る場合（その事態が現実の世界において成り立つか否かを問題にする場合）であ

り、第二は、ハズダで語られる事態を理屈の上で成り立つ事態として語るだけの場合（その事態が現実の世界において成り立つか否かを問題にしない場合）である。岡部（1998）に従って前者をAタイプ、後者をBタイプと呼ぶことにすると、ハズダの用法はまず大きくAタイプとBタイプの用法に分かれることになる。

Aタイプの用法は、事態が現実<sup>に</sup>に成立していることを話し手が確認しているか否かによってさらに二つに分けることができる。事態が現実<sup>に</sup>に成立していることを話し手がすでに確認している場合とは次のような例である。

- (2) 「彼はもとプロ野球選手だって」  
 「どうりで野球がうまいはずだ。」<sup>(4)</sup>

この場合、話し手は「彼が野球がうまいコト」が現実<sup>に</sup>に成立している（事実である）ということ<sup>を</sup>すでに確認している。その「彼は野球がうまい」という事態が理屈の上で成り立つ事態でもあることに今はじめて気づき、それによって現実<sup>に</sup>にそうあるのは当然だったのだと納得しているのである。これは高橋太郎（1975）では〈さとり〉と呼ばれていた用法で、本稿でも高橋（1975）に従って〈さとり〉と呼ぶことにする。一方、事態が現実<sup>に</sup>に成立しているかどうか未確認である場合とは、以下のような例である。

- (3) 太郎はパーティ好きだから、明日のパーティには来るはずだ。

- (4) 予定ではこのバスは明日の朝六時に京都に着くはずだ。

- (5) (山田さんはどこに住んでいるのかと聞かれて)

山田さんは八王子に住んでいたはずです。

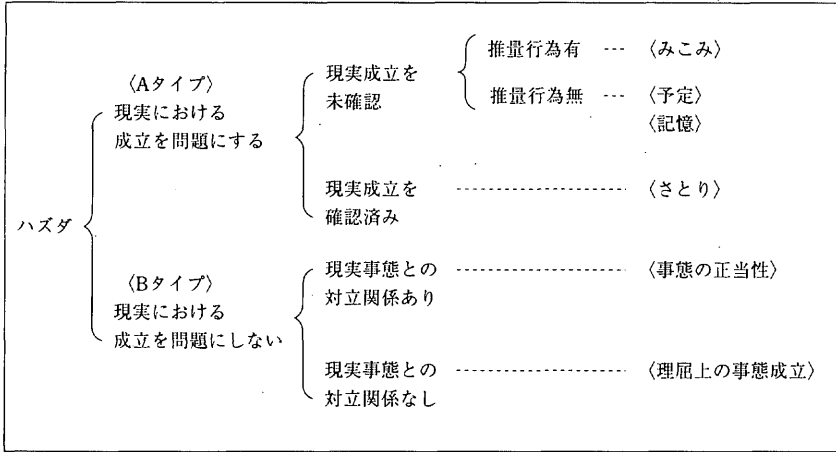
(3)は「太郎が明日のパーティに来る」という事態は（未来の事態であるから）現実<sup>に</sup>に成立しているかどうか確認し得ない未確認の事態であるが、その事態が理屈の上では成立するという<sup>こと</sup>を主張することによって、話し手の

存在する現実の世界においても成り立つに違いないという話し手の推量を表すものである。これは高橋（1975）では〈みこみ〉と呼ばれていた用法の一部であり、本稿でも〈みこみ〉と呼ぶことにする。(4)(5)においても、ハズダで語られる事態が現実<sub>1</sub>に成立しているかどうか未確認であるという点では(3)と共通している。しかし、(3)が結果的に話し手の推量行為を語っているのに対して、(4)(5)はハズダで語られる事態がいつかどこかで現実<sub>1</sub>に成り立つ事態としてあるという事態のあり方を語っている点で異なっている。(4)は何の障害もなければ未来において現実<sub>1</sub>に成り立つことが決まっている事態として当該の事態を述べる場合、すなわち「予定」を述べる場合であり、(5)は話し手の記憶に間違いがなければ、現時点ですでに成立している事態として当該の事態を述べる、すなわち「記憶」を述べる場合であるので、(4)のような用法を〈予定〉、(5)のような用法を〈記憶〉と呼んでおく。以上、Aタイプの用法には〈さとり〉〈みこみ〉〈予定〉〈記憶〉があることを述べた。

次にBタイプの用法とは次のような場合である。

- (6) おかしい。僕は徹夜で疲れているはずだ。それなのにこんなに元気だなんて。
- (7) (頭の中で暗算して)  
ええと、値段が1500円で1万円札を出したら、おつりは8500円のはずだな。

(6)(7)において話し手はハズダで語られている事態が理屈の上で成り立つ事態であるということのみを述べているのであって、それが現実の世界において成立しているか否かということには関心がないという点でAタイプと大きく異なる。(6)は「僕が徹夜で疲れているコト」に理屈の上での正当性があること、そして現実の「僕がこんなに元気であるコト」には本来正当性がないことを主張するものである。(6)のように現実事態(=僕がこんなに元気であるコト)とハズダで語られる事態(=僕は徹夜で疲れているコト)との間



〔図1〕

に対立的な関係がある場合に、話し手が「僕が徹夜で疲れている」という事態が理屈の上で成り立つ事態だと述べれば、結果的にその事態の側に理屈の上での正当性があり、現実の事態は本来正当性を欠くのだと主張することになるのである。このような用法を〈事態の正当性〉と呼ぶ。一方、(7)の場合はそのような現実との対立関係というもの存在せず、単に理屈の世界（論理の世界）においてはこうなるということを述べるだけの用法である。これを〈理屈上の事態成立〉と呼ぶ。以上、Bタイプの用法には〈事態の正当性〉と〈理屈上の事態成立〉の二つがあることを述べた。以上のことを図示すれば、図1のようになる。

## 2. ハズガナイとハズデハナイ

この節では、ハズガナイとハズデハナイについて見ていくことにする。

### 2.1. ハズガナイの基本的意味と用法

本稿では、ハズガナイの基本的意味を、

- (8) ハズガナイ＝理屈の上では当該の事態が決して成立しえないということ  
とを語る

ものだと規定する。このような基本的意味を持つハズガナイには、ハズダと同様に、Aタイプの用法（その事態が現実の世界において成り立つか否かを問題にする用法）とBタイプの用法（その事態が現実の世界において成り立つか否かを問題にしない用法）とが存在する。

Aタイプの用法の第一は、

- (9) 彼は足を骨折しているから、今日のパーティに来るはずがない。  
(10) 2年前だったら、山田さんにお子さんがいたはずはない。

のように、現実<sub>に</sub>成立しているか否か話し手にとって未確認である事態について、当該の事態が理屈の上では決して成立しえないと語ることで、その事態が現実の世界で実現する可能性は皆無だと主張する用法である。この用法を〈実現可能性の強い否定〉と呼んでおく。例えば(9)の場合、未来の出来事である「彼が今日のパーティに来る」という事態が現実<sub>に</sub>成立する可能性は皆無だと主張しているのであり、(10)の場合、過去の出来事である「2年前に山田さんにお子さんがいた」という事態が現実<sub>に</sub>成立していた可能性は皆無だと主張しているのである。

ところで、「彼が今日のパーティに来る」という事態が現実<sub>に</sub>成立する可能性は皆無だと主張することは、「彼が今日のパーティに来ない」という事態が現実<sub>に</sub>成立するのは確実であるということを含意する。したがって、(9)は、

- (11) 彼は足を骨折しているから、今日のパーティには来ないはずだ。

のように「彼が今日のパーティに来ない」という事態が現実<sup>1</sup>に成立する可能性が高いということを主張する場合（ハズダの〈みこみ〉用法）とよく似た意味を表している。しかし、細かく見ると、(9)と(11)の表す意味は異なっており、いつでも無条件に言い換えられるわけではない。(9)の場合は、「彼が今日のパーティに来ない」という事態が現実<sup>1</sup>に成立するのは確実であるという、ある種、話し手の「断定」を表すのに対して、(11)の場合は、あくまでも「彼が今日のパーティに来ない」という事態が現実<sup>1</sup>に成立する可能性が高いという話し手の「みこみ」すなわち「推量」を表すにとどまっている。したがって、

- (12) 彼は足を骨折しているから、おそらく、今日のパーティには来ないはずだ。

のように、ハズダは、「おそらく」など話し手の「みこみ」を表す副詞と共起することができるが、

- (13) ?彼は足を骨折しているから、おそらく、今日のパーティには来るはずがない。

のように、ハズガナイは、それらの副詞と共起することができないのである。

Aタイプ<sup>2</sup>の用法の第二は、新たに知った事実や知識から、ハズガナイで語られる事態が現実<sup>1</sup>に成立していないのは当然だと納得する用法である。例えば、

- (14) (まずいと評判の、客の来ないレストランの料理を実際に食べて)  
なるほど、この味じゃ、お客さんが来るはずがない。

のような場合である。この場合、当該の事態が現実<sup>(5)</sup>に成立しているか否か（お客が来るか来ないか）について、話し手はすでに確認済みである（客が来ないことを知っている）という点で、上の〈実現可能性の強い否定〉と異なっている。話し手は、実際に料理の味を体験することで「お客が来る」という事態は理屈の上では決して成立しえない事態であるということを今初めて認識し、それにより、現実<sup>(5)</sup>に「店にお客が来ていない」のは当然だと納得しているのである。これは、先行研究においてハズダの〈さとり〉用法の否定とされてきたものである。本稿でもこれに従って、この用法を〈事態不成立のさとり〉と呼ぶことにする。

以上、Aタイプの用法としては〈実現可能性の強い否定〉〈事態不成立のさとり〉の二つがあることを述べた。

Bタイプの用法としては、以下のようなものがある。

- (15) 昨日はよく寝たから、今日は疲れているはずがない。なのに、どうしてこんなに体がだるいのだろう。
- (16) おじいさんは、僕が生まれる前に死んでいたというから、僕が2歳の頃にこの世に居たはずがない。

これらは、ハズガナイで語られる事態が、理屈の上では決して成立しえないということを主張することに主眼があるものである。(15)は「今日は疲れている」という事態が理屈の上では決して成立しえないということを主張することによって、実際疲れているという現実と理屈との食い違いを際立たせる用法である。これを〈事態不成立の正当性〉と呼んでおく。また、(16)は、ただ単にハズガナイで語られる事態が理屈の上では決して成立しえないということを主張するにとどまる用法で、これを〈理屈上の事態不成立〉と呼ぶことにする。(15)と(16)にはこのような違いが存在するが、大きくこれらは、「ハズガナイで語られる事態が理屈の上では決して成立しえない」ということを主張する用法であるとまとめられるのである。

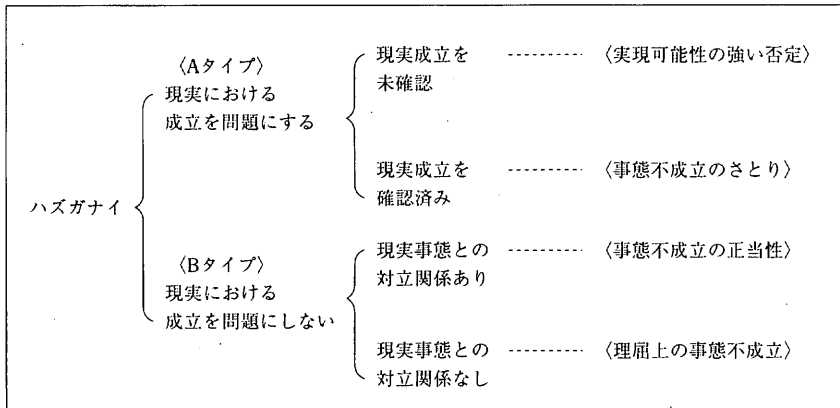


これらは、それぞれ、

- (17) 昨日はよく寝たから、今日は疲れていないはずだ。なのに、どうしてこんなに体がだるいのだろう。
- (18) おじいさんは、僕が生まれる前に死んでいたというから、僕が2歳の頃にはこの世に居なかったはずだ。(仁田義雄(1989)の用例を引用)

のようにハズダで言い換えることができる。(17)(18)はそれぞれ「今日は疲れていない」、「おじいさんは僕が2歳の頃にはこの世に居なかった」という事態が理屈の上で成り立つということを主張するわけだが、それは、「今日は疲れている」、「おじいさんは僕が2歳の頃にこの世に居た」という事態が理屈の上では決して成立しえないということと、ほとんど変わりが無いから、どんな場合でも言い換えが可能になるのである。この点は、現実での成立を問題とする〈実現可能性の強い否定〉と異なる点である。

以上、ハズガナイという形式の用法には、当該事態が現実<sup>(6)</sup>に成立するか否かを問題にする用法(Aタイプの用法)として、〈実現可能性の強い否定〉〈事態不成立のさとり〉の二つがあり、当該事態が現実<sup>(6)</sup>に成立するか否かを



〔図2〕

問題にしない用法（Bタイプの用法）として、〈事態不成立の正当性〉〈理屈上の事態不成立〉の二つがあることを示した。図示すれば図2のようになる。

## 2.2. ハズデハナイの基本的意味と用法

本稿では、ハズデハナイの基本的意味を、

- (19) ハズデハナイ＝既に現実には起こっていることを話し手が確認している事態について、それは理屈の上での必然的な筋書きとは異なるということを語る

ものだと規定する。たとえば、

- (20) (起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして)  
おかしい。こんなはずじゃない。

という場合、現実には起こった「起動スイッチを押しても機械が起動しない」という結果について、そのような結果は話し手が予想していた理屈の上での必然的な筋書きではない、すなわち、話し手が頭の中で予想していた筋書きではないということを述べているのである。

このような基本的意味をもつハズデハナイには二つの用法があると思われる。用法の第一は、

- (21) (起動スイッチを押しても起動しない機械を前にして)  
おかしい。こんなはずじゃない。(=(20)再掲)
- (22) (応援するチームが、楽勝だと思っていた格下のチームに負けて)  
このチームはこんな格下のチームに負けるはずではないのに…。

のように、既に現実には起こっていることが話し手によって確認されている事態について、その事態は話し手が頭の中で予想していた事態とは異なると主張する、言い換えれば、話し手が頭の中で予想していた筋書きは、目の前で現実には起こったような筋書きとは異なるということを主張する用法である。これを〈予想との食い違い〉と呼んでおく。

ハズデハナイの第二の用法は、例えば、

- (23) この年、選挙は行われるはずではなかった。新年早々新装なった壮麗な国技館、もはや雨天順延などということのなくなった国技館の栈敷を持った基一郎は、養子を未来の横綱として送りこんでいることもあって、上々の機嫌で客を招待したものだ。ところが片方では普選要求の声が激しくなっていた。普選を迫る民衆は演説会を開き、示威行進をし、衆議院、首相官邸に殺到した。この圧力に堪えかねた原内閣は、二月末、急転直下衆議院を解散したのである。(北杜夫『楡家の人びと』(新潮文庫))

のように、既に現実には成立していることが話し手によって確認されている事態(ここでは「この年に選挙が行われたこと」)について、その事態は本来、理屈上の必然的な筋書きとして予定されていたものではないと述べるものである。これを本稿では〈予定との食い違い〉と呼んでおく。

〈予想との食い違い〉と〈予定との食い違い〉との差は、「理屈の上での必然的な筋書き」というもののあり方の差として考えることができる。〈予想との食い違い〉を表す(21)の場合、「起動スイッチを押したら機械が起動する」ということが「理屈の上での必然的な筋書き」であるが、これは、あくまでも話し手個人が「理屈の上での必然的な筋書き」だと思っている、すなわち「予想」しているにすぎない(予想するだけの根拠はあるにせよ)ものである。一方、〈予定との食い違い〉を表す(23)の場合、「この年には選挙が行われぬ」ということが「理屈の上での必然的な筋書き」であるが、これは、話し

手の個人的予想というよりは、法律や規則に基づいて予め決まっていることであり、本稿ではこのような場合を「予定」と呼んで「予想」の場合と区別しているのである。

ここで、一つ注意しておきたいのは、ハズデハナイのこれら二つの用法は、既に現実に成立していることが確認されている事態について述べるものだということである<sup>(7)</sup>。既に見たように、ハズガナイには、現実に成立しているか否か話し手にとって未確認である事態について述べる用法（〈実現可能性の強い否定〉）や既に現実に不成立であることが確認されている事態について述べる用法（〈事態不成立のさとり〉）、そもそも当該の事態が現実に成立しているかどうかということに無関心な用法（〈事態不成立の正当性〉〈理屈上の事態不成立〉）があったのに対して、ハズデハナイにはそのような用法の広がりはないのである。

また、既に先行研究が指摘しているとおり<sup>(8)</sup>、ハズデハナイという形式は、「～はずではない」という形で使われることは少なく、多くの場合「～はずではなかった」という形で用いられる。現代語の小説10作品で実例を調査してみると、以下のような結果になる。

	用例数
ハズデハナイ	1
ハズデハナカッタ	12

調査対象が小説であることもあるが、先行研究の指摘どおり、「～はずではない」という形での使用が極めて少ないことがわかる。しかし、(21)の例が示すとおり「～はずではない」という形が使用できないわけではない<sup>(10)</sup>。

### 3 ハズガナイとハズデハナイの違いはどこからくるか

2.1.と2.2.で示したように、ハズガナイは「理屈の上では当該の事態が決して成立しえないということを語る」もの、ハズデハナイは「既に現実に

起っていることを話し手が確認している事態について、それは理屈の上で必然的な筋書きとは異なるということを語る」ものであった。それでは、この意味の違いはどこからくるのであろうか。ここでは、ハズが形式名詞であることに注目し、「～ハズガナイ」と「～ハズデハナイ」の違いを、「～トイウ本ガナイ」、「～トイウ本デハナイ」という二つの述べ方と類比的に考えることで説明してみたい。<sup>(11)</sup>「～トイウ本ガナイ」というのは「(～トイウ)本」が存在しないということである。一方「～トイウ本デハナイ」というのは、いくつかの解釈がありうるが、その一つは、「本」というものが存在することを前提として、その「本」が「～」というあり方であるのではないということである。これと類比的に考えると、「～ハズガナイ」というのは「ハズ」というものが存在しないということであるし、「～ハズデハナイ」というのは、「ハズ」というものが存在することを前提として、それが「～」というあり方ではないということだと考えることができる。

そこで、考えるべきは、この「ハズ」とは何かということである。本稿においては、「ハズ」を「理屈の上での必然的な筋書き」だと規定しておく。『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、「ハズ」とは本来、弓箭(弓の両端。弓の弦を受けること)や矢筈(矢の上端で、弓の弦をかける部分)の意であるという。そして、筈(矢筈)と弦とはよく合うところから、「物事が当然そうなること」の意に転じたとされている。<sup>(12)</sup>「筈と弦とが合う」ことが「当然のこと」と解釈されることの背後には、弓というものにとっては、筈と弦が合うことは「理屈の上での必然的な筋書き」なのだという認識があると思われるから、「ハズ」の内容を本稿のように規定することもあながち無理なことではないと思われる。

さて、以上のようにハズの意味を規定すると、「～ハズガナイ」は、「～」という事態の成立に関して「理屈の上での必然的な筋書きが存在しない」という意味になると考えられる。例えば、

(24) 彼が来るはずがない。

という場合、「彼が来る」という事態が成立する筋書きが理屈の上で存在しないと語っているのであり、それはすなわち、「彼が来る」という事態が「理屈の上で決して成立しえない」と語ることに他ならないのである。

一方、「～はずデハナイ」は、「理屈の上での必然的な筋書き」が存在することを前提とした上で、「その必然的な筋書きというのは「～」という事態（話し手にとって現実に起こったことだと確認されている事態）ではない」、言い換えれば、「～」という話し手によって現実のことだと確認されている事態は理屈の上での必然的な筋書きではない」という意味になると考えられる。例えば、

(25) (応援するチームが、楽勝だと思っていた格下のチームに負けて)

このチームはこんな格下のチームに負けるはずではないのに…。 (= (22)再掲)

という場合、話し手は理屈の上での必然的な筋書き（自分が頭の中で予想していた筋書き）というものを前もって意識しており、その上で、その筋書きというのは、話し手の目の前で現実に起こった「応援するチームが格下のチームに負ける」という事態のあり方ではないと主張しているのである。これはとりもなおさず、2.2. ではずデハナイの基本的意味として記述した「既に現実に起こっていることを話し手が確認している事態について、それは理屈の上で必然的な筋書きとは異なるということを語る」ということなのである。

以上、はずガナイとはずデハナイの違いを、「～トイウXガナイ」「～トイウXデハナイ」という述べ方一般の差異から説明した。

## 4 おわりに

最後に、ハズダという助動詞の「否定形」という観点からこの二つの形式を見ておきたい。既に、注(3)で述べたように、ハズデハナイという形式についてはハズダの否定形として考えないという見解が提出されている(金子(2003)など)。2.2. で見たように、ハズデハナイという形式はハズダという形式とは意味・用法上の対応関係をあまりもっていなかった。その点から考えると、ハズデハナイという形式は、形態論上はハズダの否定形ではあるけれども、金子(2003)の主張するように、ハズダの否定形と考えるよりも、ハズデハナイで一つの独立した形式と考えておく方がよいように思われる。

一方、ハズガナイという形式はどうであろうか。2.1. の〔図2〕で示したように、ハズガナイという形式の用法の広がり<sup>1</sup>は、〔図1〕で示したハズダの用法の広がり<sup>2</sup>とある程度の対応関係をもっている。また、ハズダが「事態を理屈の上で成り立つ事態として語る」という基本的意味をもつ<sup>3</sup>のに対して、ハズガナイは「理屈の上では当該の事態が決して成立しえない<sup>4</sup>ということ<sup>5</sup>を語る」という基本的意味をもっており、両者は「理屈の上での事態の成立-不成立」という軸で対立している。このような点から、ハズガナイという形式は、形態論上の対応はないけれども、ハズダの否定形として認めてよい<sup>(13)</sup>ように思われる。

以上、本稿では、ハズダの否定形とされるハズガナイとハズデハナイの意味と用法を整理するとともに、これらの形式が表す意味の違いを、その語構成的な側面から説明した。また、助動詞ハズダの否定形といえるのは、意味・用法の側面から見れば、ハズガナイという形式であるということも指摘した。

## 〔注〕

- (1) 本稿では、「はずがない」という形のほかに、「はずはない」、「はずもない」という形態も、格助詞「が」の部分に係助詞「は」「も」が介入した形として、「はずがない」の一種として扱う。以降、ハズガナイと表記する場合は、「はずがない」「はずはない」「はずもない」を含むものとする。
- (2) 以降、ハズデハナイと表記する場合は、「はずではない」という形のほかに「はずじゃない」という形も含むものとする。
- (3) ただし、ハズデハナイという形式については、ハズダの否定形とは考えないという研究者も多い。例えば、田村直子(1995)や金子比呂子(2003)など。金子(2003)は、「これ【稿者注：はずではない】は「～はずだ」の否定形としてではなく、「～」の内容に対する固有の姿勢を表す、独立した文末表現と考えるのが妥当であろう。」(p.156)と述べている。結論を先取りして言えば、本稿でも、この金子氏の考え方を支持する。
- (4) 特に出典を明記していないかぎり、用例は稿者の作例である。
- (5) 例えば、高橋太郎(1975)、松木正恵(1994)など。
- (6) ハズガナイとナイハズダの言い換えの可能性については松木(1994)や金子(2003)で指摘されている。ただし、どのような場合に言い換えられるのかという説明は本稿とは異なる。
- (7) ハズデハナイカ(ハズジャナイカ)のような疑問形の場合はハズデハナイとは別のものとして扱う。ハズデハナイはここで述べたように既に現実に成立していることが確認されている事態について、それは自分の予想していた事態とは異なるということを主張するものであったが、ハズデハナイカはその疑問形、すなわち、既に現実に成立していることが確認されている事態について、それが自分の予想していた事態と異なるかどうかを疑問するものではないからである。ハズデハナイカは、ハズダ(ハズダル)の否定疑問形とみるべきもので、事例のほとんどの場合は確認表現ないし反語表現であり、結果的に肯定形終止法のハズダ(あるいはハズダロウ)に置き換えられるものである。以下に実例を挙げる。

- ・「御前は今日東京へ行く筈じゃなかったか」と父が聞いた。(夏目漱石『ころ』(新潮文庫))
- ・高校三年生が四月になれば、卒業している筈じゃないか。(吉行淳之介『砂の上の植物群』(新潮文庫))

前者の例では、話し手は「御前が今日東京へ行く」かどうか未確認であり、



それを確認している表現である。ハズダロウで置き換えることが可能だと思われる。後者の例は、当該の事態は理屈の上で必然的に成り立つ事態であるということを主張するものであり、ハズダで置き換えることが可能だと思われる。

- (8) 例えば、高橋 (1975) や金子 (2003) など。  
 (9) 調査対象作品は以下のとおり。すべて、新潮文庫による。

北杜夫『楡家の人びと』, 石川淳『マルスの歌』, 山本有三『路傍の石』, 立原正秋『冬の旅』, 山本周五郎『さぶ』, 曾野綾子『太郎物語』, 井伏鱒二『黒い雨』, 林芙美子『放浪記』, 宮沢賢治『シグナルとシグナレス』, 大江健三郎『他人の足』

- (10) ただし、(2)のように指示詞「こんな」を用いて「こんなはず」とするのであれば、確かに「～はずではない」という形は使用しにくいと思われる。例えば、

・社長は午後の会議に出席するはずではない。

というのは不自然であるが、

・社長は午後の会議に出席するはずではなかった。

とするとごく自然な文になる。

- (11) 「形式名詞+ダ」という語構成をもつ助動詞（ないし文末複合辞）の否定形の二つ、すなわちXガナイとXデハナイを、このような観点から分析することについては、加藤陽子 (1994) に従った。加藤氏は加藤 (1994) において、ツモリダという形式の否定形ツモリガナイとツモリデハナイについて分析を行っている。なお、ハズダのハズについて、加藤氏は「実現が予想されること」と規定しておられるが、後で述べるように、本稿ではハズの意味をこれとは異なる形で説明している。
- (12) ハズの意味の歴史的変化については、佐田智明 (1974) が詳しい。
- (13) 寺村秀夫 (1984) は、「ナイハズダ」と「ハズガナイ」との違いを述べるなかで、「一般的にいうと、「ナイハズダ」は、「ハズダ」というムードの形式が包み込んでいるコト、その陳述の素材となっている命題の否定、いわば「内側の」否定であり、「ハズガナイ」は、「ハズダ」というムード自体の否定、つまり、否定的なムード、「外側の」否定だといえるかと思う。前者を‘Propositional negation’、後者を‘Modal negation’というふうにもいえるだろう。」(p. 271) と述べ、ハズガナイをハズダ自体の否定形として認めている

ようである。

〔参考文献〕

- 岡部嘉幸 (1998) 「ハズダの用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』(汲古書院)
- 岡部嘉幸 (2003) 「ハズダとニチガイナイについて一両者の置き換えの可否を中心に」『日本語科学』13 (国立国語研究所)
- 加藤陽子 (1994) 「名詞性をもつモダリティの否定形式について」『日本語と日本文学』20 (筑波大学)
- 金子比呂子 (2003) 「はず」吉川武時編『形式名詞がこれでわかる』(ひつじ書房)
- 高橋太郎 (1975) 「ことばの相談室 「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289
- 田村直子 (1995) 「ハズダの意味と用法」『日本語と日本文学』21 (筑波大学)
- 佐田智明 (1974) 「「はず」と「つもり」」『北九州大学文学部紀要』10
- 松木正恵 (1994) 「「～はずだった」と「～はずがない」一過去形・否定形と話者の視点一」『学術研究 国語・国文学編』42 (早稲田大学)
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味II』(くろしお出版)